

## 民俗芸能「杉沢比山」翁衣装の材料と技法に関する調査・研究

A Study of the Materials and Techniques of *Okina* Costumes Used in the Performing Folk Art “Sugisawahiyama”

角谷 彩子

Ayako Kadoya

## 要旨

日本の民俗芸能研究が始まったのは近代以降のことであり、特に衣装についてはほとんど研究がされていない。また古い時代の形を維持・継承されなかった衣装が多く、今後芸態に影響を及ぼす可能性が指摘されている。

本研究では、山形県「杉沢比山」の演目「翁」の古い衣装の技法・材料の解明を目的とした分析調査を行った。その結果、織物は五枚罫子の緞子で、身頃部は8色の緯糸（うち1色は平箔糸）と2色の経糸、袖部は5色の緯糸（うち1色は平箔糸）と2色の経糸からなることが分かった。科学検査の結果、染料は藍や鬱金のほか、緑系色は藍と黄檗の重ね染めであった。媒染剤は鉄と明礬（アルミ）のほか、無媒染とみられるものもあった。平箔糸は身頃部が錫箔、袖部は真鍮箔であった。身頃部の織物は錫箔が用いられたことから、江戸後期頃に京都で製作されたと考えられ、袖部の織物は文様に中国的要素が看取されることから、中国製と推測される。

●キーワード：民俗芸能衣装 (costume of performing folk arts) / 天然染料 (natural dyes) / 科学検査 (scientific examination)

## I. はじめに

国内の民俗芸能に関する学術的研究は1927年「民俗芸術の会」結成を機に始まったが<sup>1)</sup>、特に衣装については民間伝承という点から実物資料が乏しく、現在もその実態は明らかでない。衣装は芸能発生当初から製作・着用されたが<sup>2)</sup>、金銭的理由や社会情勢の変化の影響を受け、当初の形が維持・継承されてこなかったと推測される。こうした衣装の変容は芸態の本質とは掛離れた場で起こるため、今後、芸態自体に影響を及ぼす可能性がある<sup>3)</sup>。したがって、現存する衣装を製作面から調査することは、記録資料の蓄積のみならず、民俗芸能自体の伝承と存続に繋がるものと考えられる。

筆者は民俗芸能「番楽」の「翁」<sup>4)</sup>の古い衣装を対象に、染織技法や材料、年代などについて科学的検査を含めた調査を行ってきた<sup>5) 6)</sup>。番楽とは秋田県と山形県北部に伝承される修験系神楽の一種で、古くは修験道信仰に伴う芸態である<sup>7)</sup>。本研究では山形県の「杉沢比山」の最古の翁衣装の実物調査を通して、用いられた技法・材料を解明すると共に、文様や形態から衣装の製作背景について検討・考察を行った。

## II. 研究対象

## 1. 杉沢比山

「杉沢比山」(国指定重要無形民俗文化財)は霊峰「鳥海山」の南麓に位置する山形県飽海郡遊佐町の杉沢集落に伝承されている。奉納される杉沢の鎮守、熊野神社は「鳥海山二之王子熊野大権現」とも呼ばれ、かつては順峰衆徒が入峰修行する際の二之宿(宿場)であり、鳥海山を行場とする修験者の根拠地であった。もとは鳥海修験者が奉じてきた舞を、杉沢の人が受け継ぎ、今日まで伝承してきたものと考えられる。杉沢比山に関する古い文書記録は、安政年間(1855-1860)の火災で焼失したため、発生や伝来、比山の語義などいまだ不詳のところが多し。しかし芸態に猿楽や幸若の面影があることから、その歴史は鎌倉時代頃まで遡るとされる。

杉沢比山の衣装のうち、女役用の小袖1着に奉納者の墨書きが見られる<sup>8)</sup>。ほかにこのような墨書きが入った衣装は無く、多くが詳細不明のものである。また衣装に関する記録も無い。

## 2. 翁衣装

現在の翁の扮装は、着物に袴、腰帯に太刀を差し、手

に扇子、黒烏帽上に鉢巻、翁面（白式尉）である。杉沢比山の翁衣装は全部で3着ある。現在使用される衣装は、国指定を受けた昭和53年（1978）に国庫補助事業として衣装道具を新調した際、京都で製作されたものである。その1つ前の衣装（着物と袴）は県指定を受けた昭和32年（1957）に製作されたもので、現在は杉沢比山伝承館に展示されている。そして本研究の調査対象である翁衣装は、杉沢比山が所持する衣装道具の中でも最古の部類のものとされる（写真1）。この衣装と同時に使用する袴は残っていない。3着全て同じ形態で金糸が織込まれた絢爛な衣装であるが、織模様や色に統一性は見られず、新調の際にこれらの点については考慮されなかったと考えられる。したがって、本研究の対象である最古の衣装についても、杉沢比山成立初期の衣装の要素をどの程度受け継いだものであるかは推測できない。

衣装の身頃と袖はそれぞれ別の織物で構成されており、身頃の方は劣化が激しく、経糸が無くなった箇所も見られるが、袖は比較的綺麗な状態である。このことからもとは袖と身頃は同じ織物であったが、袖の劣化が進行し、代替として別の織物を袖として用いた可能性が考えられる。双方の織文様は異なるが、色調はよく似ており、付け替える際に配慮されたことが窺える。本研究では身頃部と袖部に分けて調査を行った。

### III. 研究方法

衣装を服飾史と科学分析の観点から考察する。目視で衣装の形態や素材、組織を確認し、繊維や染着状態についてはマウント剤を用いて光学顕微鏡で観察した。次に科学検査によって染料の分析を行い、標準試料と比較して同定を行った。標準試料は、試料となる糸毎に想定される天然染料と媒染剤を用いて糸を染色し、分析に供した。科学検査は一般財団法人材料科学技術振興財団に委託した。下記に詳細を示す。

#### 1. 科学検査

##### (1) 薄層クロマトグラフィー（以下 TLC）

試料および標準試料から染料を抽出・分離<sup>9)</sup>、スポットの色調や染料の混合の有無などについて確認を行った。以下に装置および測定条件を示す。

プレート：シリカゲル TLC プレート K6F（Whatman）

展開溶媒：①クロロホルム / ヘキサン / ジエチルエーテル = 8/1/1 (v/v/v)

②酢酸エチル / 水 / ギ酸 = 85/15/10 (v/v/v)

v)

##### (2) 高速液体クロマトグラフィー（以下 HPLC）

試料および標準試料から染料を抽出・分離<sup>10)</sup>、定性分析と定量分析を行う。双方のピークを比較し、染料の同定を行った。以下に装置および測定条件を示す。

装置：Acquity HPLC H-Class Bio（Waters 社製）

Acquity HPLC eλPDA 検出器（Waters 社製）

カラム：TSKgel ODS-100S（4.6mm × 150mm, 5μm）

カラム温度：40℃

移動相：A:10mM リン酸（ナトリウム）緩衝液 pH2.6

B: アセトニトリル

##### (3) 液体クロマトグラフィー質量分析法（以下 LC/MS）

HPLC を用いて試料成分を相互分離し、カラム抽出液をオンラインで質量分析計に誘導し、定性・定量を行う<sup>11)</sup>。以下に装置および測定条件を示す。

装置：Prominence UFLC（島津製作所社製）

カラム：Cadenza CD-C18（2.0mm × 150mm, 3.0μm）

カラム温度：40℃

移動相：A：0.1% ギ酸水溶液、B：アセトニトリル

検出器：Triple TOF 5600 +（AB SCIEX 社製）

イオン化法：ESI

##### (4) 蛍光 X 線分析（以下 XRF）

試料に X 線を照射することで発生する、元素固有の蛍光 X 線を検出し、エネルギーや分光結晶で分光することで試料に含まれる元素の分析を行う。以下に装置および測定条件を示す。

装置：XGT7200V（堀場製作所製）

分光法：エネルギー分散型 X 線分光法（ED-XRF）

X 線管：Rh、X 線検出器：シリコンドリフト検出器

管電圧：50kV、管電流：1.0mA

ビーム径：約 1.2mm、測定時間：100 秒

測定雰囲気：真空

検出可能元素：ナトリウム（Na）～ウラン（U）

#### 2. 標準試料

標準試料用の絹糸は、(株)シラカワのシルクロービング 36/2（精練済み、無染色）を使用した。絹糸は 10g の繻に分け、染色前に 50～60℃のお湯で湯通しを行った。

##### (1) 青

絹糸 10g を(株)田中直染料店のインド藍液<sup>12)</sup>で 3 分間浸染した後、水中酸化させた。

##### (2) 黄・茶系

試料に用いた染料は黄檗、鬱金、刈安、柘榴、梔子、

えんじゆ 槐、ヤマモモ、五倍子、丁子、びんろうじ 檳榔子、阿仙、丹殻、胡桃の13種である。染料10gに対して25倍量の水で沸騰後、20分煮沸抽出した液と、更に同量の水を加え20分煮沸抽出した液を合わせ、ガーゼで濾したものを染料液とした。染料液200ccに対して2.5倍量の水を加え染浴とし、絹糸10gを入れ70～90℃で20分染色した。(浴比1:70) 染色後はアルミ媒染で黄色、鉄媒染で茶色に発色させた。媒染剤は濃縮灰汁液(アルミ)と木酢酸鉄(鉄)を用い、それぞれ5%濃度となるよう水に溶解して媒染液とし、染色後の糸を室温で15分浸した。

### (3) 緑系

天然染料で緑色を染める場合、古来より藍と黄色染料の重ね染めが行われており、標準試料も同様の方法で製作した。絹糸10gを(1)の藍液で1分間浸染、水中酸化させた後、黄檗、鬱金、刈安、柘榴、梔子、槐の6種の染料を用いて(2)と同様の方法で染色し、5%濃度に溶解した濃縮灰汁液(アルミ)に室温で15分浸した。

## IV. 研究結果

### 1. 所見

衣装の採寸結果を表1に示す。身頃に袖が直接付いておらず、双方の間に布帛(身頃部と同じ織物)を渡し、肩部にゆとりを持たせた構成である。衿が無く、脇が開いており、前を紐で結んでとめる点など、ひたたれと似た形態である。袖口に袖括(そでくり)の緒(お)の露(つゆ)、首元に立ち襟が付き、背肩部のみに裏地が縫い付けられている。

身頃部は鶴と雪輪、松と橘の文様が表された五枚縺子(しよす)の緞子<sup>13)</sup>である(写真2)。織幅は約53, 8cm、緯糸の劣化が激しく、経糸のみが残っている部分が見られる。経糸は地を構成する母経(青糸)と、文様及び地となる緯糸を表面に出し、他の糸を沈める陰経(白糸)の2色からなる。色緯の数は白・黄・黄緑・緑・水色・橙・茶の7色と、金の平箔糸<sup>14)</sup>の計8色である。母経は弱いS撚りの双糸で、陰経と緯糸は撚りが見られない。

表1 杉沢比山「翁」直垂 寸法

部位	寸法	部位	寸法
前身丈	121.5cm	袖 丈	88.0cm
後身丈	155.0cm	袖 幅	50.5cm
総 桁	67.5cm	布帛丈	28.3cm
前身幅	25.5cm	布帛幅	7.0cm
後身幅	37.5cm	振 り	61.0cm
肩 幅	16.0cm	衿 幅	5.5cm

袖部は柘榴と花蔓草文様が表された五枚縺子の緞子である(写真3)。織幅は約52.5cm、経糸は母経(青糸)と陰経(白糸)の2色からなり、色緯の数は白・黄・緑・茶の4色と、金の平箔糸の計5色である。経糸・緯糸ともに撚りは見られない。

## 2. 身頃部の分析結果

### (1) 経糸

青の糸(母経)はHPLCの結果、検出波長614nmで25分付近に大きなピークが確認された。藍の標準試料と保持時間が一致したため、藍による染色であることが確認された(図1)。

### (2) 緯糸

緑の糸はTLCの結果、プレート上で青と黄のスポットに分離し、2色の色素が存在していることが分かった。黄・黄緑・緑の糸はHPLCの結果、検出波長345nmと415nmでそれぞれ10分付近に大きなピークが、また検出波長614nmで25分付近に大きなピークが確認された。藍と黄檗の重ね染め標準試料と保持時間が一致したため、黄・黄緑・緑の糸は藍と黄檗の重ね染めであることが確認された(図2)。

水色の糸はHPLCの結果、検出波長614nmで25分付近に藍由来のピークが確認された(図3)。

橙の糸はHPLCおよびLC/MSの結果、検出波長415nmで20～26分付近のピークは、マススペクトルよりクルクミンであると推定された。鬱金の標準試料からも同様のピークが得られたため、橙の糸は鬱金による染色であることが確認された(図4)。

茶の糸はHPLCで有用なクロマトグラムが得られず、染料の特定には至らなかった。

### (3) 媒染剤

白(無染色)の緯糸のXRFスペクトルを標準として、他の緯糸に用いられた媒染剤の検討を行った。白の緯糸からは、絹灰分の主成分元素である硫黄(S)、繭層や生糸に含まれるアルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、リン(P)<sup>15)</sup>、ほかカリウム(K)、カルシウム(Ca)、鉄(Fe)が検出された。

経糸および水色の緯糸は藍による染色のため、媒染剤は用いられない。残りの5色の緯糸のうち、茶の糸はFeの吸着が顕著に見られたため鉄媒染であることが確認された(図5a)。黄緑および橙の糸はAlの若干の吸着、およびKの吸着が観測され(図5b、c)、緑の糸のAl強度は標準とほぼ変わらないが、Kの吸着が観測さ

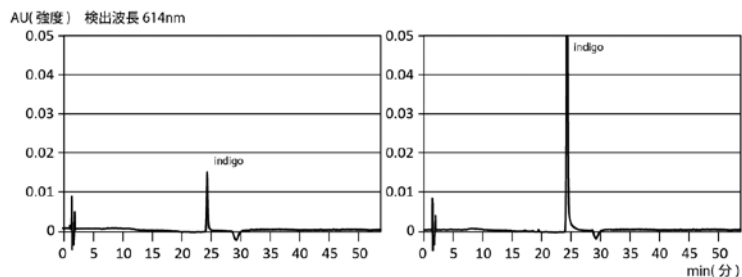


図1 身頃部経系 HPLC クロマトグラム (右) 藍標準試料、(左) 青

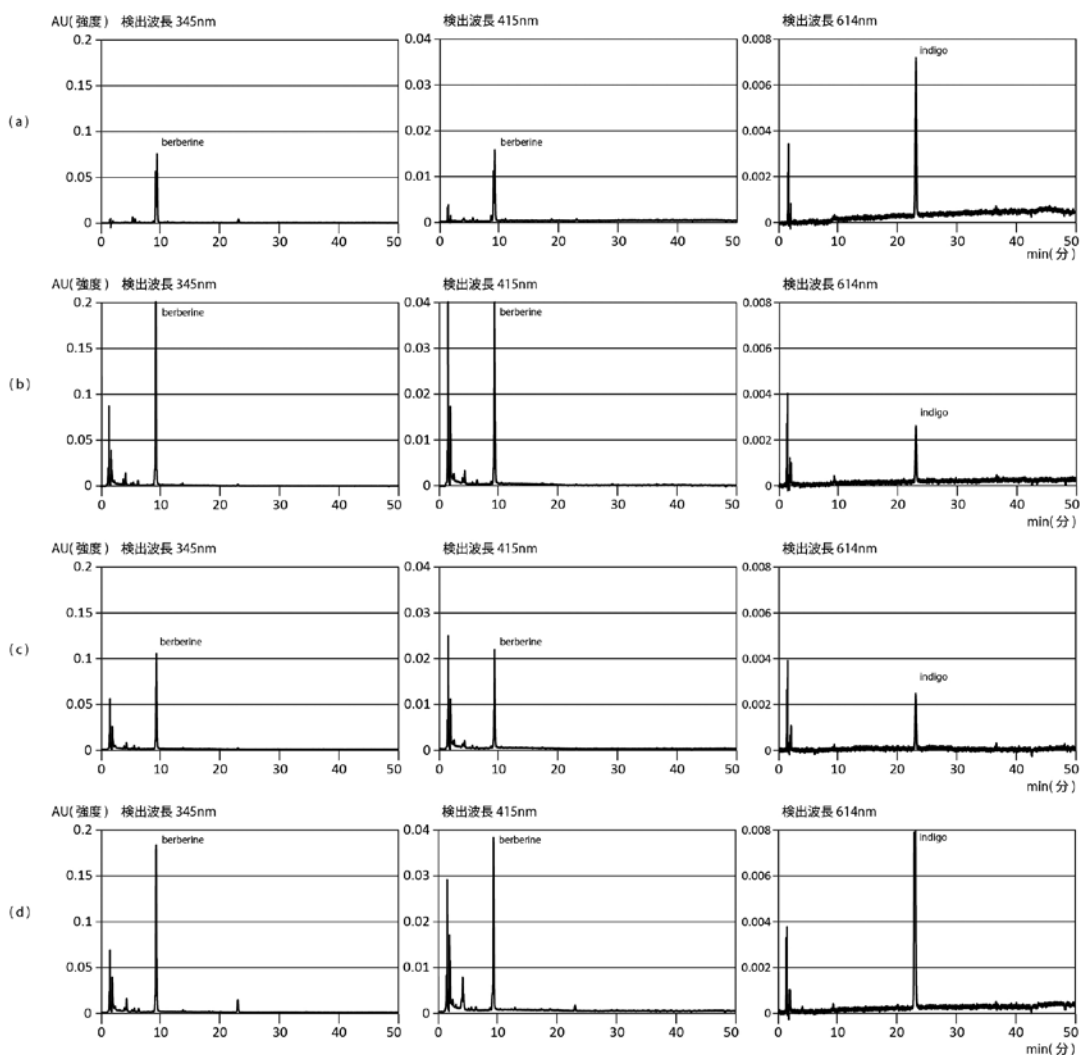


図2 身頃部緯系 HPLC クロマトグラム (a) 藍と黄堇重ね染め標準試料、(b) 黄、(c) 黄緑、(d) 緑

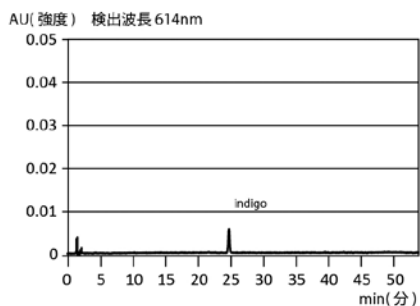


図3 身頃部緯系 HPLC クロマトグラム 水色

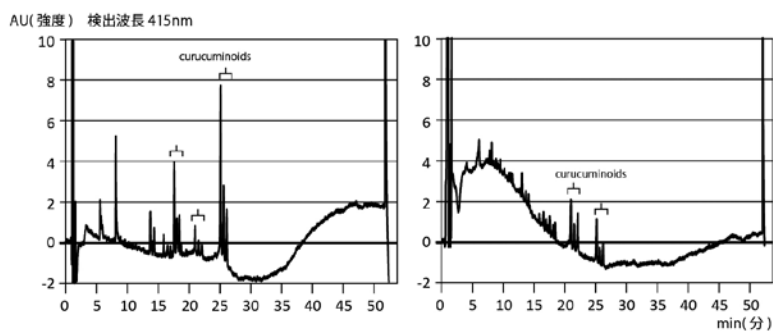


図4 身頃部緯系 HPLC クロマトグラム (右) 鬱金標準試料、(左) 橙

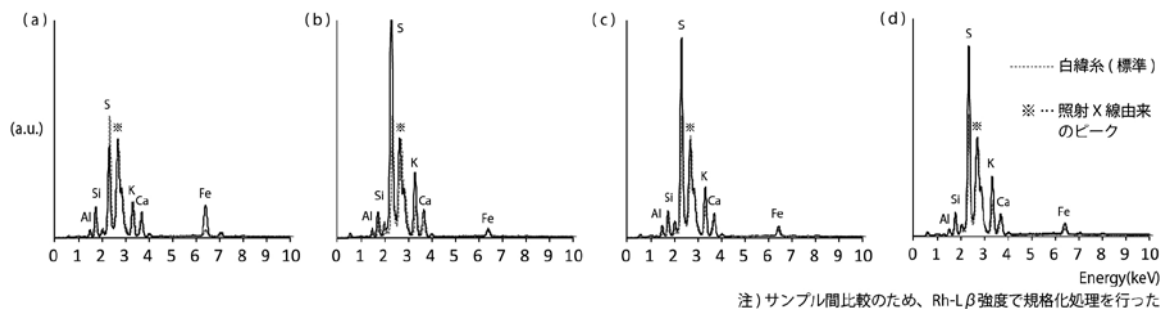


図5 身頃部緯糸 XRF スペクトル (a) 茶、(b) 黄緑、(c) 橙、(d) 緑

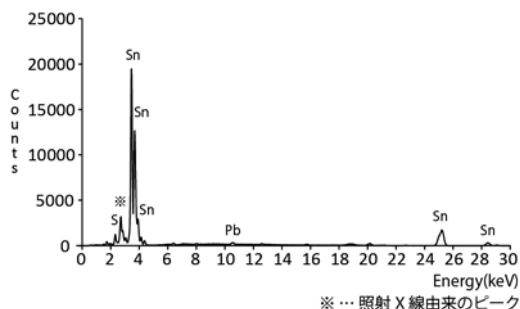


図6 身頃部平箔糸 XRF スペクトル

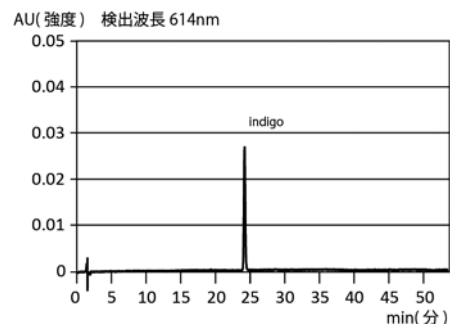


図7 袖部経糸 HPLC クロマトグラム 青

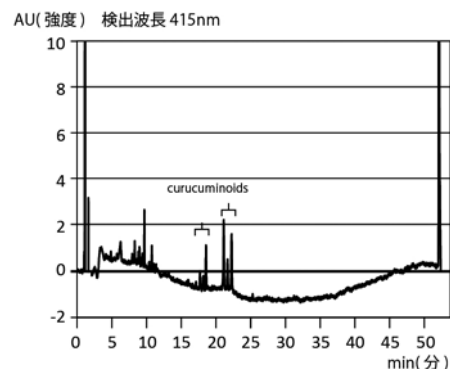


図8 袖部緯糸 HPLC クロマトグラム 黄

れたことからアルミ媒染(明礬)であると推測される(図5d)。黄の糸は標準と比較してスペクトルに変化は見られなかった。

#### (4) 平箔糸

平箔糸からは XRF の結果、主にスズ (Sn) の分布が確認され、錫箔糸であることが判明した(図6)。ほか S や鉛 (Pb) などはいずれもピークが小さく、不純物が検出されたものと考えられる。

### 3. 袖部の分析結果

#### (1) 経糸

青の糸(母経)は HPLC の結果、検出波長 614nm で 25 分付近に藍由来のピークが確認された(図7)。

#### (2) 緯糸

黄の糸は HPLC および LC/MS の結果、検出波長 415nm で 18~24 分付近に鬱金由来のピークが確認された(図8)。

緑の糸は TLC の結果、青と黄に色素が分離する様子が確認された。HPLC の結果、検出波長 345nm と 415nm で 10 分付近に藍由来のピークが見られ、藍と黄檗の重ね染めであることが確認された(図9)。

茶の糸は HPLC で有用なクロマトグラムが得られず、染料の特定には至らなかった。

#### (3) 媒染剤

身頃部と同様に無染色である白の緯糸の XRF スペクトルを指標として、他の緯糸に用いられた媒染剤の検討を行った。白の緯糸からは絹糸に含まれる Al、Si、P、S のほか K、Ca、Fe が検出された。

経糸は藍による染色のため、媒染剤は用いられない。茶の糸は Fe の強度の上昇が見られたため、鉄媒染であることが確認された(図10a)。緑の糸は K の吸着が観測されたことからアルミ媒染(明礬)であると推測される(図10b)。黄の糸は標準と比較してスペクトルに変化は見られなかった。

#### (4) 平箔糸

平箔糸からは XRF の結果、主に銅 (Cu) と亜鉛 (Zn) が検出されたことから、Cu と Zn の合金である真鍮箔



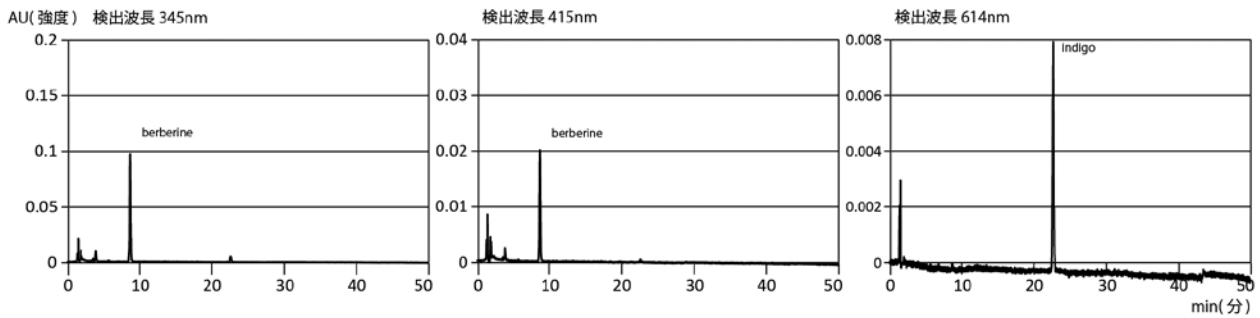


図9 袖部緯糸 HPLC クロマトグラム 緑

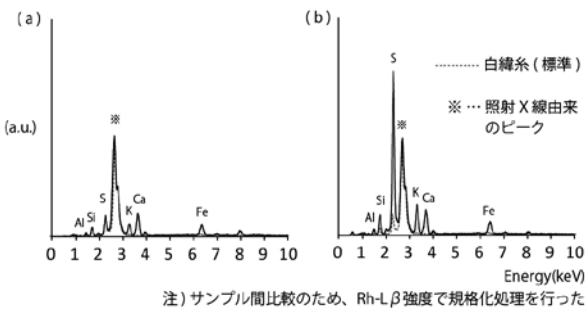


図10 袖部緯糸 XRF スペクトル (a) 茶、(b) 緑

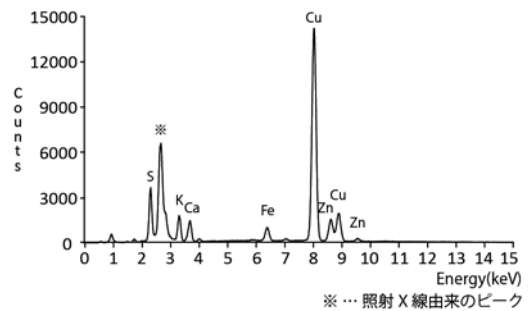


図11 袖部平箔糸 XRF スペクトル

と推測される (図 11)。ほか S は硫化による成分が検出された可能性が考えられる。

## V. 考察

全分析結果を表 2 に示す。

### 1. 染料

HPLC の検出波長 345nm および 412nm のピークは、黄色色素ベルベリン由来のものと考えられる。ベルベリンを含む黄系染料は、黄檗のほかにおうれんがあるが<sup>16)</sup>、ベルベリン型アルカロイドに関するピークは確認されなかったため、黄檗であると結論づけた。身頃部の黄・黄緑・緑の糸は藍と黄檗で染色されていたが、黄・黄緑の糸の検出波長 614nm に見られる藍のピークは、緑の糸のピークと比較して小さい。このことから藍の含有量(濃度)によって、色合いに変化を持たせたことが分かる。また黄・黄緑の糸は藍の含有量が小さかったため、TLC で青のスポットが生じず、色素の分離が確認されなかったと考えられる。

HPLC の検出波長 415nm の 18~26 分付近の特徴的な 3 本のピークは、黄色色素クルクミン由来のもの(鬱金)と思われる。またマススペクトルで推定組成式  $C_{19}H_{16}O_4$  が得られたことから、成分名はビスデメトキシ

クルクミンであると推測される。

### 2. 媒染剤

染織品の媒染剤の同定には蛍光 X 線による分析法が多く用いられるが、Al などの軽元素は感度が低く、測定が困難な場合がある。また標準(無染色の緯糸)の XRF 結果が示すように、媒染剤の主成分である金属元素 (Al, Fe) は、絹糸自体にも含まれている。松田・三好 (1989) によると、鉄媒染布は K に比べ Fe を多量に含むことが報告されている<sup>17)</sup>。袖部の茶の緯糸の K と Fe は、X 線強度の上昇が同程度であったが、Al や K の吸着が見られないことから鉄媒染であると推測した。

身頃部の黄緑、緑、橙の緯糸および袖部の緑の緯糸は、いずれも Al 含有量は標準とほぼ同じであったが、K の吸着が観測されたことから K を含む明礬(硫酸カリウムアルミニウム)による媒染であると考えられる。またこれら 4 つの緯糸は、多量の S の吸着が目立つ。S は媒染や染色の工程による量的変化をほとんど受けないが<sup>18)</sup>、本分析では染料の異なる緯糸に共通して観測された。このことから、何らかの理由で媒染の工程中に吸着したものと考えられる。

身頃部および袖部の黄の緯糸は、標準と比較してほぼ変化が無いことから無媒染であると推測される。

表2 杉沢比山「翁」衣装 分析結果

部位	組織	糸		色	染料	媒染剤	ほか
身頃	緞子 五枚縹子	経糸	母経	青	藍	—	
			陰経	白	無染色	—	
		緯糸	白	無染色	—		
			黄	藍と黄檗の重ね染め	無媒染		
			黄緑	藍と黄檗の重ね染め	アルミ媒染（明礬）		
			緑	藍と黄檗の重ね染め	アルミ媒染（明礬）		
			水色	藍	—		
			橙	鬱金	アルミ媒染（明礬）		
			茶	不明	鉄媒染		
		緯糸（平箔）	金	—	—	錫箔糸	
袖	緞子 五枚縹子	経糸	母経	青	藍	—	
			陰経	白	無染色	—	
		緯糸	白	無染色	—		
			黄	鬱金	無媒染		
			緑	藍と黄檗の重ね染め	アルミ媒染（明礬）		
			茶	不明	鉄媒染		
		緯糸（平箔）	金	—	—	真鍮箔糸	

### 3. 平箔糸

17世紀末頃、幕府は長崎貿易の金銀輸出や産出量の減少を受け、数度の奢侈禁止令を出した。その中で既存の金銀糸に代わり、銀を燻した唐箔や、錫箔・真鍮箔・銅箔などが代用品として台頭した<sup>19)</sup>。江戸から明治期にかけ錫箔は原紙に箔を押したもの（天箔）に、着色や艶出し加工を施す技術が発達し、昭和初期にアルミ箔が登場するまで、模造金銀糸として使用された。錫の箔糸を用いた染織品は、特に江戸後期から幕末頃に見られるようになり、帯地や袋物など庶民に向けて製作されたものに多い<sup>20)</sup>。錫箔の加工技術は京都が独自に開発し、終始京都のみで生産された<sup>21)</sup>。これらの点から、身頃部の織物は江戸後期頃に京都で製作された可能性があると見える。

### 4. 文様

袖部の織物は、粒を内包した柘榴や果実の周りを花草が取り囲み、蔓を巡らせた文様が表されている。所々の葉には、渦巻く円弧を繋げた表現（図12a）や強い巻き込み線（図12b）、異国外来種と思われる形（図12c）が認められ、日本に伝来した中国製織物の特徴と類似している。こうした表現は明清時代の中国装飾に類出する。なだらかな曲線で構成される日本の植物文様と比べ、中国の植物文様はうねりや渦巻く表現が多く、強い曲線が特徴である<sup>22)</sup>。袖部の文様からもこうした中国的表現

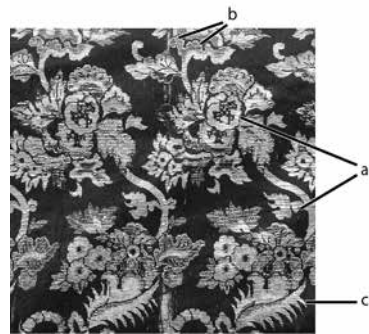


図12 袖部 植物文様

が看取されることから、中国製の織物であると考えられる。

袖部の緯糸に真鍮の平箔糸が用いられているが、中国内での真鍮箔の製造時期は不明である<sup>23)</sup>。江戸期の絹織物の国内輸入量は17世紀後半以降、国産織物業の発展により減少傾向にあった。文化末期頃の中国船による絹織物輸入量のうち、緞子・縹子が占める割合は数%に留まり<sup>24)</sup>、幕末の開港まで増加することはなかったと推測される。袖部の織物は、傷みの程度から身頃部より新しい時代のものと推定され、幕末以降に輸入された織物である可能性が考えられる。

### 5. 形態

箔糸を織り込み、青を基調とした織物が用いられた点

は、秋田県南部の「横岡番楽」(象潟町横岡・本海流番楽<sup>25)</sup>)の翁衣装と類似している。しかし横岡番楽を含め、鳥海山麓に伝わる本海流番楽の翁衣装の形態は、長着または狩衣であり、杉沢比山の翁のように直垂の形の衣装は見られない。また秋田県北部の番楽の翁衣装とは、形態も文様も全く異なる。本海流番楽と同系統とされる山形県最上郡の番楽<sup>26)</sup>は、既に翁の演目は途絶えており、衣装の詳細は不明である。杉沢比山は鳥海修験と関わりが深く、衣装についても少なからず影響を受けたものと考えられるが、同じく鳥海修験を起源とする本海番楽の衣装とは隔たりが見られる。

民俗芸能の衣装は新調する際、以前の衣装を摸して作られる事例とそうでない事例があり、後者の場合、芸能伝承者側が意図的に行った(経済的な事情、華美化など)ものや、奉納されたものなどがある。杉沢比山では、金銭的に厳しかった時代には衣装を寄付品で賄ったという話があるが、具体的にどの衣装が該当するかは定かでない。しかし先述の通り、周囲と相違することを踏まえると、翁の衣装が寄付あるいは奉納品である可能性は否定できない。また同種の神楽だけでなく、他種の芸能衣装との関連も視野に入れ、更に広く調査検討する必要があるだろう。

## VI. まとめ

山形県の修験系神楽「杉沢比山」の翁の古い衣装について、製作面を中心に分析調査を行った。衣装に用いられた技法や染料に特徴的なものは見られなかったが、平箔糸や文様から織物の製作年代と場所を推定した。衣装の伝承については、他種の芸能衣装から影響を受けた可能性も踏まえ、更なる調査が必要であると考えられる。

今後は衣装の技法・材料の解明のみならず、文様や形態の体系化も含め、引き続き修験系神楽の芸能衣装の調査を継続していきたい。

## 謝辞

本研究は一般財団法人守谷育英会研究助成を受けたものである。本研究を行うにあたり、杉沢比山連中の伊藤嘉治治代表ならびに保存会の皆様、遊佐町教育委員会の阿部秀雄様、菅原善子様にご協力頂きました。あわせて厚く御礼申し上げます。

## 注

1) 民俗学事典編集委員会『民俗学事典』丸善出版、2014

- 2) 舞踊と扮装の関係は「舞踊を生かすための扮装」と「扮装を生かすための舞踊」の2つに分類される。芸能は衣装や道具を用いた動作や着替えが多く、こうした物着は儀式的舞踊の名残とされる。(小寺融吉『舞踊の美学的研究』大河内書店、1948)
- 3) 坪井有希『「備中神楽」衣装の色彩』吉備人出版2011, p.114-126
- 4) 芸能では老人の姿をした「神」を意味し、翁が自分の素性を語り土地を祝う言葉を述べながら、舞台を踏みまわり五穀豊穰、息災延命を祈る舞である。(三隅治雄『日本民俗芸能概論』東京堂出版、1972, p.109-114)
- 5) 角谷彩子『民俗芸能衣装の製作に関する調査・研究一「番楽」翁衣装の事例一』文化学園大学紀要、49, 2018, p.17-27
- 6) 角谷彩子『民俗芸能「番楽」翁衣装の材料と技法に関する調査・研究』服飾学研究、1, 2018, p.1-13
- 7) 「純粹の御神樂ではなく、今ある猿樂の能でもなく、舞樂、延年の類とも異り、又、幸若や人形浄瑠璃や歌舞伎等とも同一ではない。しかも、それらの何れの要素をも、幾分かづは備へてゐるかに思はれる(中略)近邊の山伏達が寄つて一團をなし、その廣い霞の村々を、月餘に亘り、火伏せや悪魔拂ひの祈禱に、その奉ずる権現の獅子頭をまはしつゝ、毎年、隔年、若しくは三年目毎等にめぐつたもの」(本田安次『山伏神樂・番樂』齋藤報恩会、1943, p.1)
- 8) 奉納者の名前と「于時、嘉永五、子、七月日」の墨書きがあり、嘉永5年(1852)奉納の衣装である。
- 9) 試料にN, N-ジメチルホルムアミドを加え、20分間超音波処理した後、80℃で60分間加温し抽出液を得、抽出後の糸に同様の処理を再度実施し、得られた抽出液を用いて藍を展開する条件にてTLCを実施した。
- 10) 試料にN, N-ジメチルホルムアミドを加え、20分間超音波処理した後、80℃で60分間加温し抽出液を得た。抽出後の糸に同様の処理を再度実施した後、0.5M塩酸/メタノール=1/1(v/v)を加え、同条件にて2回抽出を行った。得られた抽出液を合わせ、溶媒を蒸発させたものをN, N-ジメチルホルムアミドに再溶解させ、測定試料とした。
- 11) 中村洋, 公益社団法人日本分析化学会編『LC/MS、LC/MS/MSの基礎と応用』オーム社、2014, p.4
- 12) 天然のインド藍を液体にしたもの。水10Lに対し、溶解液300mL、3倍希釈した安定剤270mL、ハイドロサルファイトナトリウム10g、インド藍液300gを順に溶解し、染料液とした。
- 13) 緞子とは、縺子地をベースにして文様を同じ縺子地の裏組織で織り出したもので、先染の絹糸を用いたものを指す。(小笠原小枝『染と織の鑑賞基礎知識』至文堂、1998, p.88)
- 14) 平箔とは、和紙に漆を塗りその表面に箔を貼り付け、細い糸に裁断したもの。中世から近世にかけての金糸はこのタイプが多い。(村上隆『金・銀・銅の日本史』岩波新書、2007, p.37)
- 15) 布目順郎『養蚕の起源と古代絹』雄山閣出版、1979
- 16) 吉岡常雄『天然染料の研究—理論と実際染色法—』光村推古書院、1974, p.84
- 17) 松田泰典, 三好正毅『古代染織資料の非破壊分析』古文化財の科学、34, 1989, p.1-10
- 18) 前掲書14), p.5
- 19) 宝永2年(1705)の触書に「唐箔ト称シ銀ヲ薫シ金箔色ニ模造シ以テ之等ノ器具ニ装用スルヲ以テ之後唐箔ヲ製造スルヲ許サズ且ツ近歳真鍮箔銅箔錫箔ヲ創製ス宜ク之ヲ以テ換用



- スベシ」とある。(京都金銀糸工業協同組合編『京都金銀糸平箔史』1987, p.89-92)
- 20) 小笠原小枝『日本の美術 220 金襴』至文堂, 1984, p.80
- 21) 前掲書 16), p.107-109
- 22) 吉田雅子『海のシルクロードの染織史』中央公論美術出版, 2017
- 23) 中国明代の宋王星「天工開物」(1637) に亜鉛の単離に関する記述があり、この頃には亜鉛と銅を混ぜた黄銅(真鍮)の製造技術が確立されていたと考えられる。(成瀬正和『正倉院宝物に見える黄銅材料』正倉院紀要, 29, 2007, p.62-79)
- 24) 文化 11, 12, 14 年の中国船による絹織物輸入量のうち、緞子・縞子は全体の 4.0% である。(貫秀高「日本近世染織業発達史の研究」思文閣出版, 1994, p.78)
- 25) 京都醍醐三宝院の修験とされる本海行人が、寛永年間頃(1624-1645)、鳥海山麓一帯に伝授した番楽。(秋田県鳥海町教育委員会『本海番楽』2000, p.6)
- 26) 山形県最上郡金山町有屋の稲沢・柳原番楽、最上郡真室川町の平枝・釜淵・八敷代番楽の 5 団体が現在も活動している。

#### 参考文献

山形県遊佐町教育委員会『重要無形民俗文化財杉沢比山資料集』1981



写真1 杉沢比山「翁」衣装（杉沢比山連中所蔵）筆者撮影 左：前，右：後ろ



写真2 身頃部 上：文様、下：組織拡大図



写真3 袖部 上：文様、下：組織拡大図